

研究ノート

社会学を考える (2)  
— 社会学の位置と社会学研究のあり方 —

片 桐 新 自

Thinking of Sociology (2):  
Significance of Sociology and Sociological Research Methods

Shinji KATAGIRI

**Abstract**

This paper discusses the kind of subject sociology should be, considering the present situation in the field. Since the paper presents various issues without inhibition, it may be estimated that logical consistency is missing. However I have a firm belief that sociology should be a positive science with a macro perspective.

Key word: sociology, literature, technical term, metaphor, example

抄 録

本稿は、社会学の現状に危機感を持ち、社会学はどのような学問であるべきかについて私見を述べたものである。多面的な切り口から自由に述べさせてもらっているので、一見すると一貫性に欠けたものと思われるかもしれないが、社会学という学問は、マクロな視野をもった実証的な学問であるべきだという考え方がその根本にある。

キーワード：社会学、文学、専門用語、比喩、例示

はじめに

- 第1章 固有名詞の社会学は難しい (2000.11.5)
  - 第2章 専門用語を学ぶことの重要性 (2001.2.20)
  - 第3章 大学院生のレベル低下を憂う (2001.4.1)
  - 第4章 比喩の魅力と危険性 (2001.6.1)
  - 第5章 文化へ走る都市社会学、環境に入れ込む村落社会学 (2001.7.18)
  - 第6章 機能分析はそんなにだめか? (2001.8.8)
  - 第7章 昭和初期の社会学のイメージ——野上弥生子の視線—— (2001.11.9)
  - 第8章 「虫の眼」と「鳥の羽」 (2002.3.31)
  - 第9章 30秒でわかる社会学 (2005.8.1)
  - 第10章 文学的な、あまりに文学的な……  
——見田宗介著『社会学入門——人間と社会の未来』(岩波新書) 批判—— (2006.5.22)
  - 第11章 名著選びは難しい——竹内洋著『社会学の名著30』(ちくま新書)を読む—— (2008.5.21)
  - 第12章 文学と社会学 (2012.1.24)
- おわりに

注：( ) 内の日付は、ウェブサイトでの公開日を示す。

## はじめに

社会学を教え始めて15年以上経った20世紀の終わり頃から、社会学のあり方について自分なりの考えを発信してみたいと思うようになった。たまたまその頃に個人のウェブサイト (<http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~katagiri/socio/>) を開設していたので、まずはウェブサイトで自分なりの社会学観を公開した。非常におもしろいので活字としても読めるようにしておいた方がいいのではとアドバイスを何人かの方から受け、最初の頃に書いていたものをまとめて、「社会学を考える——社会学の再生を求めて——」(『関西大学社会学部紀要』第32巻第1号, 179-204頁, 2000年9月) として発表した。

その後も少しずつ書いてはウェブサイトで公開してきたが、活字にまとめて発表するには少し量が足りないかなと思いながら過ごしてきたら、はや12年の月日が経ってしまった。この辺で、その後書いたもののうち、活字に残しておきたいものを久しぶりにまとめておこうと思い、本稿を発表することにした。こういう事情があるので、今回まとめた12章の執筆時期は、目次を見てもらえばわかるように、2000年から2012年という長期に渡っている。本来なら、内容的な近接性で章の順番を決めた方が読みやすいのだが、古いものもあるので書いた順を意識してもらうために、章は書いた順のままにしておいた。ただし、執筆時期が古いものでも、その内容は今も通用する内容だと思っている。各章は独立しているので、興味のある章から読んでいただいて、一向に構わない。本稿を読むことで、社会

学の位置や社会学研究のあり方について、ヒントをつかめたという人が出てくれれば、執筆者として嬉しく思う。

## 第1章 固有名詞の社会学は難しい

私は、この複雑に絡み合った現代社会の中で、社会的にみて重要なテーマを自分で見つけだせるようになることが、社会学の第1歩と思っているので、3年次ゼミ生には、まず全く自由に夏のレポートをまとめさせています。今年提出されてきたあるレポートを読みながら、改めて思ったことは、固有名詞をレポートのタイトルに据えてしまうと、社会学的研究をするのは難しくなるということです。そこに地域社会がある地名のような場合はいいのですが、それ以外の固有名詞のつくものを研究対象にしてしまうと、その対象の持つ特殊性を十分に相対化できなくなり、社会学になりにくくなります。もちろん、それが社会的影響を与えるほどのものであるならば、その対象の社会的影響を社会的に分析することはできます。しかし、その対象の出現に関する社会的原因の方は、必ずしもうまく見いだされるとは限りません。というより、たったひとつの固有名詞のつく対象だけで社会的原因を語ろうとするなら、それは無理があると思われてしまうことがまずほとんどでしょう。

ひとつ例をあげてみましょう。かつて、「巨人の星」、「あしたのジョー」、「柔道一直線」などの大人気スポーツ漫画のストーリーを生み出した梶原一騎という漫画原作者がいました。彼の描き出すストーリーは、1960年代の日本社会に広く受け入れられ、日本に「スポーツ根性漫画」(スポコンもの)と言われるジャンルを根付かせました。また、彼の人気によって、それまでストーリーも作画も一人の漫画家が生み出すものと思われていた漫画界に、ストーリーを担当する原作者と作画を担当する漫画家という分業制度が広く普及することとなりました。そういう意味で、間違いなく彼の登場は大きな社会的影響力を与えており、その社会的分析は可能です。他方、彼がなぜ登場しえたか、あるいは彼がなぜ受け入れられたかということに関しては、一般的には、当時の高度経済成長に突き進んでいた時代背景と東京オリンピック前後のスポーツに対する関心の高まりなどから、説明がなされます。もちろん、この関連性は私もあると思っていますが、この因果関係の説明に説得力を持たせるためには、梶原一騎だけに注目してはだめなのです。もしも、当時の社会——そこで生きていた子供や青年たち——がこういう漫画を求めていたのだとしたら、それは梶原一騎に止まらず、似たようなスポーツ根性漫画をたくさん人気漫画に押し上げて

いなければならないのです。そして、実際に当時はそういう状況でした。それゆえ、その中の代表格として、梶原一騎と当時の社会状況の関係は説得力のあるものとして認めることができるのです。もしも、梶原一騎だけで、他には当たったスポーツ根性漫画がなければ、果たして時代が要請していたから当たったのか、それとも梶原一騎に優れた個人的才能があったからなのか、説明はつかなくなるでしょう。

1990年代のはじめに「たま」というバンドがいたのを覚えていますか。妙な歌を歌っていましたが、「たま」が日本の音楽シーンを変えると主張する人も結構いました。「たま」を分析する本というのでも何冊か出たように記憶しています。でも、結局「たま」は日本の音楽シーンを変えませんでした。「たま」に高い評価を与え、「たま」で社会学をやろうとしていたら、見事にはずれてしまったことでしょう。(ちなみに、私は「たま」の音楽を高く評価していなかったし、「たま」が日本の音楽シーンを変えるなどとは、毛頭思っていないのでした。当時の社会状況が「たま」を求めているとは、私には思えませんでしたので。)

このように、固有名詞のついた対象をタイトルに据えなければならないような研究は、社会的にはなりにくいのです。もちろん、最初の研究動機が固有名詞のついたものへの関心から出発することはいっこうに構わないと思います。そして、社会的な研究にする気がないなら、そのまま固有名詞をタイトルに持ってきて研究しても、何の問題もありません。ただ、あくまでも社会的な研究にしたいと思うならば、最終的には一般名詞をタイトルに持ってこられるようなところまで、視野を広げる必要があると私は思います。(2000.11.5)

## 第2章 専門用語を学ぶことの重要性

理論社会学という講義を担当していて、しばしば学生から言われるのが、専門用語がたくさん出てきて、覚えきれない、抽象的でおもしろくないということです。確かに、専門用語というのは、日常生活であまり使わないものなので、学ぶ意義というのが実感できないのかもしれない。私も、新しい概念づくりに明け暮れたり、アカウンタビリティを無視したような専門用語の羅列には大いなる疑問を感じますが、概念を学ぶこと自体の重要性は、軽視してはいけないと思っています。なぜなら、私たちがもしも概念を一切知らなければ、他人に話を伝えることもできなくなってしまうからです。「猫」や「犬」だって概念です。もしこれらの概念を知らなければ、「猫が犬に追いかけていた」というエピソードも、「四つ足の丸い顔をした動物が、同じ四つ足だけどもう少し顔のとがった少し大き

い動物に追いかけていた」なんて、ややこしい表現をしないと伝えられなくなります。いや、「動物」「足」という概念や「丸い」「とがった」という概念も知らなければ、もう言語自体を発することが不可能になります。もちろん、「猫」「犬」「動物」「足」といった具体的なものを指示する概念と、社会学の抽象的な専門用語は大分異なります。しかし、「丸い」「とがった」というのは、よくなじんだ言葉なのでそう思われていないかもしれませんが、明らかに抽象的概念です。他にも、「青春」「恋愛」「仕事」「かわいい」「おいしい」「ラッキー」だって抽象的概念です。こうした概念を使わずにコミュニケーションをとるのは非常に困難であることは容易に理解してもらえましょう。

では、社会学の専門用語はそうした概念と同程度に必要なものでしょうか。そう問われれば、確かに生きていく上で知らなければならないというほどのものではないと答えなければならぬでしょう。しかし、小学1年生には1年生なりの、6年生には6年生なりの覚えなければならない言葉があることからわかるように、年齢とともに私たちは使える概念を増やし、表現力を豊かにし、分析力を鋭くしていくのです。ことわざや格言だって、知らなくても生きていく上では困らないと思いますが、知っていれば、知らない人より多くのことに気づきます。たとえば、「朝令暮改」という格言が中国の故事から来ていることを知っていれば、昔からこういう安易な法改正に悩まされてきたこと、日本だけの問題ではないことにはすぐ気づきます。ことわざや格言には、人間の行動や心理が陥りやすい問題点を指摘したものがたくさんあります。それゆえ、知っていると、自分を相対化して見ることもできますし、場合によっては対処法まで見いだせます。社会学の専門用語も、ことわざや格言程度には、あるいはそれ以上に使い度があるものだと思います。「潜在的機能」も「カリスマ的支配」も「価値合理的行為」も「フリーライダー」も「権威主義的パーソナリティ」も「AGIL 図式」も、ちゃんと理解していれば、この複雑な社会と社会現象をかなり整理して私たちに示してくれます。すべて学べとは言いませんが、使い度のある社会学の基本概念ぐらいいはしっかり学んで駆使できるようになってほしいと思います。そうすれば、他者とのコミュニケーションもしやすくなるし、社会もよく見えて生きやすくなります。小学生に社会学の専門用語を学ばせる必要はありませんが、高校生や大学生ならしっかり学ぶ価値があると思います。最後にもう一言。学ぶというのは、暗記するというのではなく、理解するということです。(2001.2.20)

### 第3章 大学院生のレベル低下を憂う

社会学を勉強しはじめてから25年、社会学を教えはじめてから18年も経ちました。いつのまにやら、社会学の中堅研究者となり、最近はいろいろな論文の審査に携わる機会が多くなりました。そうした中で気になっているのは、審査する論文のレベルの低さです。一昔前なら、こんな論文は、指導教官がチェックして、投稿させなかったはずだと思う論文が次から次に審査論文として回ってきます。投稿者は若い大学院生が多いはずですので、なるべく良いところを見つけて、全体的な筋は変えずに改善をなすうようにコメントしてあげたいと思うのですが、どう頭をひねっても、このままでは無理と思わざるをえないような論文が少なからずあります。中には、ワープロの変換ミスは何箇所もそのままにしてあるような論文もあります。思わず、一度ぐらい読み直しをしてから、投稿しなさいと言いたくなってしまいます。

こういうレベルの低い投稿論文がたくさん現れるようになった原因はいくつか考えられます。第1に、ワープロの普及で、時間的には論文を書くことが非常に簡単になったことがあげられます。私は、ワープロが普及する以前に大学院生時代を過ごしていますから、1本の論文を書くということは、大変な作業でした。構成を練ってから書き始めても、何度かの推敲が必要になり、最後にようやく1本の論文にたどり着くという時代でした。今の若い人だと、ひとつの調査研究で何本も論文を書く人が少なくありませんが、私などは、ひとつの調査研究の結果は、たった1本の論文にそのもっとも重要なエッセンスを詰め込むことで、完結させてしまうという形で来たので、今になっても、ひとつの調査研究で何本も論文を書くことができません。

第2の原因としてあげられるのは、社会学の蛸壺化です。本来幅広い知識と分析を必要とする総合学であるべき社会学が、連字符分野で分かれ、さらにアプローチでも分かれ、小さなグループ化してしまっているため、その小グループのみに通用すれば、それで社会学として成立すると思いがちな若手研究者を生み出してしまっているのです。似たような関心を持った人が集まった小グループのみを意識して研究すると、どうしても重箱の隅をつつくような研究が主流になります。はじめに大きな問題意識をもって研究をスタートさせるのではなく、いかにして他の人がやっていないことを見いだすかのみ熱心になります。まだ他の人が扱っていない資料を書庫から探し出してきて、その資料を使って研究できる研究課題を後付のように考えていく、あるいはまだ他の人が扱っていないフィールドに入り込み、そのフィールドのことをただひたすら紹介する、そんな論文に頻繁に出くわ

します。たまに論文としての体裁が整っているものがあったとしても、なぜこの対象を研究しようとしたのか、なぜその資料のみに限定して研究しているのか、なぜそのフィールドを選んだのか、という根本的な疑問に答えていない場合が少なくありません。

第2の原因ともからんでくる第3の、そしてより重要な原因が、大学院生の急激な増加です。旧文部省による、日本の高等教育の現実とはかけ離れた「大学院大学構想」に、名門国立大学がこぞって乗っかり、大学院の拡充化をはかってきました。「拡充化」と言っただけで、大学院入学と博士号授与のハードルを下げ、たくさん大学院生を取り、多くの「課程博士」(注1)を出すことで、予算を確保し、教授たちは「◇◇大学〇〇学部教授」ではなく、「××大学院△△研究科教授」と名乗り、地位が上がったような快感を得るというだけで、実質的には何も充実させていない改革だったわけですが、ここに来て、その潜在的逆機能が顕在化してきました。文部省と名門国立大学による安易な発想での大学院生の増加は、間違いなく大学院生全体のレベルを落としました。理科系の大学院のように、修士課程終了後、企業や研究所に即戦力として就職して行けるならいいのですが、社会学ではそんな道也没有ありません。本来なら、「大学院の拡充化」という形で入口を広げたなら、就職という出口についても整備をし拡張しなければならないはずなのに、それを全くしていないので、大学院に入ってきた若い人たちは、みんな、かつての大学院生と同様、いつの日か大学の教師になることを夢見つづけています。結果として、何が起こるかと言えば、大学教師を夢見る実力のない大学院生の急速な増加です。修士であきらめて他の道を探してくれればいいのですが、本人があきらめない限り、結局は博士課程に来てしまいます。そうなる、もう必死で論文を書いて、何とか大学教師という職を得るチャンスをうかがうわけです。しかし、現実には大学は倒産もありうる「冬の時代」に突入しています。どんだん市場は狭まるばかりです。

そういう過剰な競争の中で、若い大学院生は自分の評価を高めるために、論文をレフリー制度のある学会誌等に投稿してきます。しかし、十分な実力を養わないまま博士課程に来てしまった人も少なくないため、論文の書き方の基礎も身につけていないような投稿論文が出てくるわけです。たぶん、これは今もあまり変わっていないのではないかと思います。社会学の大学院生は、修士課程の頃は自信喪失気味なのですが、博士課程に入ると、妙に過剰な自信を持つようになります。もちろん、昔の博士課程の大学院生の自信も実力からすれば過剰気味でしたが、今の大学院生に比べれば、まだましだったと思います。今の大学院生ははっきり言って「水割り院生」です。博士課程にいるからと言って、天狗にならず、努力を積み重ねないと、この厳しい競争主義の中では生きていけません。課程博

士の取得を目指すというのもわかりやすい努力目標かと思いますが、私は個人的には、この課程博士取得を目指すという行き方が、逆に現在の大学院生の社会学者予備軍としての実力をそいでいるのではないかと危惧しています。かつてなら、課程博士など取れるわけではないので、少し幅広く勉強し、社会学研究者としての実力を養う期間としての意味も持っていた博士課程が、今やひたすら博士論文を書くための期間となっているとすると、幅広い社会学の素養はどこで養ったらよいのでしょうか。理系の研究のように、ある分野の徹底的した専門家になれば済む学問と違い、社会学には幅広い知識が絶対必要です。それをどこかで身につけないと、よき社会学者にはなれません。博士論文を書くなどとは言いませんが、近視眼的にそれだけをするのではなく、ぜひ、社会学内部での他流試合をしてほしいと思います。領域もアプローチも似ている仲間内だけで傷をなめ合っているような研究会より、いろいろな問題関心をもった人が集まる研究会に出て、自分の議論のひとりよがりなところに気づくことが必要です。自分のフィールドを持つのは大事なことだと思いますが、それだけに留まらず、「社会学には何ができるのか、どうあるべきなのか」という自問自答もしつづけてほしいと思います。これからの時代は、本当に社会学もわかっていて、自分のフィールドも持っているような人のみが、職を得られるような時代になると思います。(2001.4.1)

(注1) 大学院博士課程入学後一定期間内に博士号を取得したものを「課程博士」とよぶ。かつて日本の社会学界では、博士号は社会学史上に残るような著書を書いた、その分野の達人のような研究者にのみ与えられるもの(こういう博士を「論文博士」とよぶ)と位置づけられ、博士課程入学後数年程度ではとうてい取れるものではないという認識が共有されていた。欧米の社会学界では、以前から、博士号はもっと簡単に出していたので、日本もそれに近づけ、アジアの留学生を日本の大学院に來させようという狙いがあると言われる。

#### 第4章 比喩の魅力と危険性

抽象的な話をわかりやすく伝えるためには、具体的な話に置き換えることが必要です。その置き換え方には2種類あります。ひとつは例示で、もうひとつは比喩です。この2つの違いを意識せずに使っている人が少なからずいるように思いますが、この2つは全く異なるものです。まず、例示とは、ある抽象的事象に包摂される具体的事象を示すことです。例えば、「代表的な国際的大都市としてはニューヨークがあげられる」と言えば、例示したことになります。これに対して、比喩はある事象に対する理解度を高めさせるために、説明を受ける人にとってイメージしやすい類似事象を示すことです。例えば、「ニューヨーク

は、日本で言えば東京のような都市である」といった言明が比喩にあたります。ともに、日常的に非常によく使われるコミュニケーション・スキルですが、厳密さを要請される研究者の文章の中で使う場合には、この2つのスキルの違いをしっかりと認識しておかなければなりません。

例示の方は、正確に使う限りたくさん使ってもわかりやすくなるだけで問題はないですが、比喩の方はたくさん使うことには慎重にならなければいけません。というより、比喩はなるべく使うべきではないと思います。というのは、比喩は説明ではないからです。例えば、上にあげた「ニューヨークは東京のような都市」という言明にしても、なんとなくわかったような気になりますが、実際には全く正しい説明になっていないどころか、誤解すら与えかねません。例えば、この言明を聞いた人の中には、ニューヨークを東京と同じく首都だと思ってしまう人が必ずいると思います。確かに両都市には似たようなところもありますが、異なる点も山のようにあるのです。比喩というのは、そういう相違点を無視して、類似点だけを意識してなされている非科学的な（説明的ではないという意味で）言明なのです。あえて言えば、文学的な（イメージをふくらましようという意味で）言明です。

文学にとって比喩は不可欠でしょう。比喩を全く使わずに詩を書いたら、おそらく味もそっけもないものになると思います。しかし、社会学という学問は科学です。説明になっていないこうした比喩を使うことはなるべく避けるべきです。ところが、「社会学は科学である」という見方に懐疑的な立場を取る社会学者も少なくなく、こうした「社会学者」の書く文章には、比喩が何の躊躇もなくたくさん出てきます。たぶん、その方が文章にふくらみが出て、読む人にとっておもしろく思えると考えているのでしょう。その気持ちはよくわかります。私のように比喩の乱用を避けるべきだと思っている人間でも、きちんと意識していないと、比喩を使って説明した気になっているときがしばしばあります。数学のような学問では、比喩の入り込む隙間もないでしょうが、コントの示した「学問の階梯論」で言えば、一番最後に実証的段階（科学）に到達した社会学は、比喩の入り込む余地がもっとも大きい科学です。研究対象が人々の営む生活なのですから、同じく人々の生活を叙述する文学との境目が曖昧になりやすいのです。（研究者によっては、意図的にその境目を取り払おうとしている人もいます。）

しかし、比喩が読み手にどれほど豊かなイメージを与えようとも、社会学の研究論文であるなら、比喩の使用には十分すぎるほど慎重になるべきだという立場は崩すべきではないと思っています。比喩はそれを使っている人と同じレベルで理解できないことが多くあります。時には、その比喩が使われたゆえに、何が言いたいのかよくわからなくなってし

まうということも少なくないのです。抽象的な話、難しい話をわかりやすくするために使うべきなのは、例示であって比喩ではないということをよく理解してほしいと思います。(2001.6.1)

## 第5章 文化へ走る都市社会学、環境に入れ込む村落社会学

社会学の伝統ある連字符領域として、「都市社会学」と「村落社会学」（農村社会学という場合もありますが、山村・漁村の存在も考えるなら、村落社会学の方がよいでしょう）があります。ともに地域社会を扱っているのだから、両者を「地域社会学」として合体させると唱える人もおり、そういうタイトルのついた本もたくさん出されています。私もある時期まではいずれはそうなるのかなと思っていましたが、ここ10年ぐらいの両分野の趨勢を見ながら、どうやら「地域社会学」という連字符領域が「都市社会学」や「村落社会学」に取って代わることはなさそうだと認識を改めました。というのも、都市社会学系の研究者——特に若手——は、都市の文化に対する関心を強めているのに対し、村落社会学系の研究者は、環境問題への関心を強めているからです。つまり、ともに地域社会を扱うという共通性が、焦点を当てる要素の相違によってかき消えて、両領域の進む道はどんどん離れていっているのです。

両領域のこうした研究趨勢は一時的、特殊なものではなく、それぞれの対象がもつ本質的な部分を追求していくとどうしてもそうならざるをえなくなるという類のものなので、中長期的に見ても、両者の距離はより離れることはあっても近づくことはないと思えます。まず、都市は人口密度の高い地域と規定できなくもないですが、都市化が進んだといったときにイメージされるのは、単に人口が増えたということではなく、都市的生活様式が普及したということです。その都市的生活様式を可能にするのが様々な文化なのです。「都会に行きたい」と田舎に住む人があこがれるのは、人の多さではなく、都会（都市）にある文化に対してなのは明らかです。つまり、現代の都市にとって文化はその本質に関わるものと言っても過言ではないのです。それゆえ、現代の都市について考えようとする研究者が、文化研究へ流れるのは必然と言えるのです。もちろん、意識して行えば、文化研究ではない都市研究も可能です。しかし、そのように意識しなければ、都市という場に関心を持つことは、自動的に都市の文化に関心を持つことになると思います。

次に、村落ですが、農村、山村、漁村、そのいずれにもある魅力的なものは何かと言えば、自然環境です。都会に住む人が「田舎にいつてゆっくりしたい」と思うとき、必ず念

頭に浮かんでいるのは、豊かな自然の光景です。その自然は、必ずしも人の手が一切入っていないものでなくても構わないのです。むしろ、人に恐れを感じさせない、人とともにある自然の方がいいのかもしれません。「ふるさと」の歌詞が思い浮かぶような里山の風景、きれいに整備された棚田の景色、見事に植林された杉林、小舟が連なる港の風景、いずれも先人たちが生活の必要性から生み出してきた人間の手の入った自然です。そうした人間の営みとの関わりをもつ自然が村落には豊富にあります。いや、ありました。今、社会全体が都市化していく中で、こうした村落の自然環境が急速に失われてきています。村落を魅力ある場所と捉え、研究対象にしようとした人たちが、こうした自然環境の問題に敏感にならないはずはありません。こうして、村落社会学は、環境社会学へと怒濤のように向かっていくのです。

文化研究も環境研究もここ10年、社会学においてもっとも人気がある分野で、業績もたくさん出てきています。こうした講義を聴きたいという大学生の需要も高まってきており、大学でもポストが増えてきています。都市社会学と村落社会学をひとつに統合するためには、それぞれの地域社会構造の特質などを語らなければならないのですが、そういう時流に乗っていない堅苦しい研究は、今後増えていくことはないでしょう。このように考えてくると、都市社会学と村落社会学が地域社会学という名で統一されることは期待薄だという結論がいやでも出てくるのです。(2001.7.18)

## 第6章 機能分析はそんなにだめか？

「機能」という概念を使うと、それだけで反発する社会学者が結構いるのですが、機能分析のどこが一体そんなにだめなのでしょう。ある人は、「機能」は社会システムのあるべき状態をあらかじめアプリアリに決めてはじめて使える概念で、「機能分析」とは結局その状態の維持存続にとって意味があるかどうかを語ろうとする保守的議論だからだめだと言います。確かに、機能的かどうかを語るためには、ある種の価値判断が入り込むと思います。しかし、そうした価値判断を一切拒否して本当に社会の研究はできるのでしょうか。現在、「価値観の多様化」「共生の時代」等々、口当たりのよい言葉がいろいろあり、こういう言葉を使いたがる人たちは、さも「価値観の押しつけはしないよ」と主張しているようです。しかし、実は彼らも、「どの立場にも優先順位をつけてはいけない」という平等主義や、「どんなに立場が異なる人とでも仲良く暮らさなければいけない」という共同主義の価値観を押しつけているとも言えるのです。最近話題の教科書問題や靖国神社参拜問題で

も、進歩派（一般的に多様な価値観を認める立場）を自認する人たちが、言論と信仰の自由を弾圧しにかかっています。かつて迷惑をかけた近隣諸国の意向こそ最重視すべきだという価値観の押しつけになっていることに、本人たちは気づかないのでしょうか。

社会学でも同じことです。機能主義には保守的の偏向があると批判している人たちにも、間違いなくイデオロギー的偏りはあります。そもそも価値判断なしでは研究対象の選択すらできないのですから。現代のように価値観が多様化した時代においては、どれが保守的でどれが進歩的な立場なのか、一義的には決められません。とりあえず、ある社会現象を研究対象として取り上げた際には、誰でもその社会現象がどのような因果関連で生まれてきたのかを研究するとともに、今の時代の中でどのような意味を持っているかを研究するはずで。その意味というのを機能と言い換えてもいいのです。私は、基本的には社会学は社会の多くのメンバーにとって意味のあること——社会的機能を持つこと——を研究すべきだと思っていますが、中には大多数のメンバーにとっては意味はないが、ある少数集団にとって意味があるという場合もあるでしょうし、そうしたものを社会学の研究対象から排除すべきだとは思いません。その場合でも、機能の考察は可能です。ただし、社会にとっての機能というより、集団にとっての機能、極端な場合は個人にとっての機能と呼べるものになるかもしれません。

このような機能概念の使い方は、機能概念の内実を失わせてしまうという批判がなされるかもしれません。T. パーソンのように、社会システムに普遍的に必要とされる機能的要件を確定すべきだという立場に立つ人なら、そういう批判をするでしょう。しかし、現実の社会システムで必要とされる機能的要件はもっと複雑です。たとえば、パーソンズが不可欠と考えた目標達成機能は、確かにあった方が社会システムがスムーズに動くかもしれませんが、明確になくとも社会システムは動きます。逆に、パーソンズはあげていませんが、社会システムの問題点を指摘し、それを修正していくというような機能（これを私は「活性化機能」と呼んでいます）などは、多くの社会システムで必要とされていると思います。それゆえ、私はいかなる社会システムにも不可欠な機能的要件を確定しようとするリジッドな機能主義ではなく、サイズも形態も様々な個々の社会システムごとに、その内部にある諸要素がいかなる機能を果たしているかを考えていく素朴な機能主義（機能分析と言った方がいいかもしれません）が、社会学には必要だと考えています。もちろん、いかなる機能を果たしているかを語る時に必ず研究者の価値判断が入り込みます。しかし、先に述べたように、そうした価値判断を一切せずに研究はできないのですから、そのことを恐れ躊躇する必要はないでしょう。

当事者が気づいていない潜在的機能を発見することこそ社会学の醍醐味だという人と、そういうものを発見できていることが社会学者の傲慢さだという意見があります。私はどちらかといえば、もちろん前者に近い立場です。ただし、自分の発見した潜在的機能がすべての人たちにとっての真理であるというような主張をするつもりはありません。ただ、私が意識的・無意識的に選択した価値観からみた場合という前提をおけば、当事者が思ってもいないような機能を指摘できる可能性は十分にあると思っています。日常生活を生きている当事者たちは、通常あまり大きな社会的連関などは視野に入れていません。それゆえ、自分の行為が社会的にどんな意味（機能）を持つかなどを自覚して行動しません。他方、社会学者は常にそうした発想で行為や現象を眺めるわけですから、当事者に見えないものが社会学者に見えることは十分あるわけです。（もちろん、行為そのものについては、当事者の方がよく知っているわけですから、当事者にはわかっているが、社会学者にはわからないということも多々あるわけですが……。）いずれにしろ、社会学的意味の探求とも言うべき機能分析を捨て去ってなしうる社会学の仕事がそれほどあるとは私には思えません。（2001.8.8）

## 第7章 昭和初期の社会学のイメージ——野上弥生子の視線——

野上弥生子が昭和3～5年（1928～30年）にかけて書いた小説『真知子』は、当時社会学がどのように捉えられていたかをよく示しており、大変興味深い本です。「日本社会学史」を称するような書物では、どうしても学者・学説の紹介が中心になってしまい、時代が社会学をどう受け止めていたかという空気まではなかなか読みとることはできません。しかし、小説という形ですと、登場人物それぞれの立場から、社会学に対する印象が語られることになり、「学史」が語りきれないものを伝えてくれます。もちろんその際、作家の知識、認識、表現等によって伝えうるものは大きく異なるわけですが、私が読む限り、野上弥生子という作家は、実によく勉強していて、社会学についても自分なりにきちんとつかんでいたのではないかという印象を持ちました。おそらく、ある層——具体的には上流階級や上層中流階級——で当時抱かれていた社会学のイメージは確実に伝えられているのではないかと思います。

古い小説ですので、お読みになっていない方が多いと思いますので、簡単にあらすじを紹介します。

主人公の曾根真知子は23歳の美しい女性で、母親と2人暮らしである。高級官僚だった父はすでに亡く、兄1人、姉2人は結婚して家を出ている。年齢的に結婚適齢期ということで、母親や親戚筋から結婚の話が持ち込まれるが、真知子は結婚する本人の意思を無視して、結婚話が進むことを屈辱的であるとすら感じている。彼女は、専門学校を出たのち、東京帝国大学で社会学を聴講している。(実際、東京帝国大学では、大正9年(1920年)から聴講生制度を創設し、女性も講義を聴けるようになった。)社会に対する強い関心と上流階級の女性たちの俗物性に強い批判の気持ちを持ち、自分の生活も変えなければならないと考えている。恋愛と結婚、思想と現実が複雑に絡み合いながら、物語は展開していく。

さて、この紹介でわかるように、主人公は社会学を学んでいるわけです。そこで、そのことに関連して彼女に対して様々な言葉が投げかけられるわけです。そのいくつかを紹介してみましょう。

1. 「真知子さんみたいな美しい方が、社会学なんて似合いませんって」(兄嫁の母親である田口倉子=病院長の妻の発言)
2. 「社会学という言葉聞いたとき、柘植夫人の濃い尻上がりの眉は、何か不気味な毒虫の名前を耳にしたごとく、額で痙攣した。」(柘植夫人=子爵夫人)
3. 「何も社会学なんて、そんなものを勉強なさらなくたってよきそうなものじゃありませんかって。だいち、誤解され易うございますからね。ちゃんとした家のお嬢さんで、そういう学問をなさっては」(田口倉子)
4. 「どうしても哲学の方でなければお悪いのなら、美学なんかでもございましょう。それなら間違いのない学問でしょうし、社会学なんてものより聞いただけでも優美でよろしゅうございますわ。ねえ、そうお思いになりません」(田口倉子)

ある階級の人々にもたれていたイメージにすぎないかもしれませんが、この時代ロシア革命の成功を受け、マルクス主義思想が日本でも急速に広まり、日本共産党の結成(1922年)、「3・15事件」(1928年)等もあり、社会主義思想やマルクス主義に対する警戒が強まっていました。そんな中で、社会学もそれらと近いところにある学問ではないかと警戒されていたことがわかるかと思います。

しかし、現実には、東京帝国大学の教授によって語られていた社会学は、そんな危険なも

のとはほど遠いところにあり、むしろマルクス主義の立場からは、長く「ブルジョワ学問」として批判されていました。1898年から1922年まで東京帝国大学の社会学講座を担当した建部遯吾は、日露開戦を唱えた「帝大七博士」の一人で国粹主義的思想の持ち主として有名でした。(逆説的な話ですが、あの建部遯吾がやる学問なら、左寄りではないのだらうと思われ、講座が戦時中もつぶされずにすんだという話も残っているぐらいです。) 後を継いだ戸田貞三は、はじめ心的相互作用論を中心とした形式社会学を講じ、後には家族に関する実証的研究を行い、いずれにしろ社会改善や政治に直接関わらない研究をなしていました。しかし、学んでいる学生たちの中には、こうした講義に飽きたらず、社会の諸問題を具体的に解決するための活動をすべきだという志向から、「新人会」や「セツルメント活動」に入っていき者も多かったようですので、田口夫人や柘植夫人の社会学に対する危険なイメージもあながち間違いであったとは言えないでしょう。

田口夫人や柘植夫人の人物像の設定と認識に関しては少し揶揄するようなところも見られますが、かと言って野上弥生子は社会学を高く評価しているわけでもないことを明確に示します。それは、主人公の真知子にこう言わせているところによく表れています。

5. 「哲学と経済学から常に挟み撃ちにされている社会学の独立科学としての基本的な欠陥が、このごろ漸く彼女の批判を刺激した。できたら、経済にかわりたかった。」(曾根真知子)

70年以上前の小説で書かれたことなのに、もしかしたら社会学はまだこの基本的欠陥を克服できていないのではないかと思わされてしまう指摘ではないでしょうか。(2001.11.9)

## 第8章 「虫の眼」と「鳥の羽」

社会学はマクロな視野を持たなければいけないということは何度も指摘してきたことですが、だからと言って、最初からマクロなデータだけ集めようとする、社会学の研究はあまりおもしろいものではないと感じる人が多いと思います。マクロなデータということになると、やはり統計的なデータが中心になり、そうした数字を見ているだけだと、個々の事例が持っている魅力というものを感ずることは困難です。調べていて楽しいなと多くの人が思えるのは、個々の事例がもつ個別の魅力に出会う時でしょう。「こんなおもしろい所があったのか」とか、「こんな素敵な人と出会えた」なんて経験ができれば、研究するこ

とが実に楽しくなってくることは間違いありません。いや、そんな特別にすばらしいものに出会わなくとも、現実を見たり感じたりするだけでも、数字を眺めていることの何百倍も楽しい作業のはずです。実際、本を読むのが嫌いな今どきの学生たちも、現場に出かけていく「フィールドワーク」と聞くと、目を輝かせます。私は、学生たちのこの感性を否定するつもりはありません。むしろ、その感性をそれぞれがさらに磨いて、そこから社会学研究をスタートさせてほしいと思っています。そして、その感性をより生かすためには、地面を這う虫のような気持ちになって、徹底して細かいことも調べ出してほしいと思っています。大空を舞う鳥の眼では見つからないものが、虫の眼でならたくさん見つかるでしょう。社会学研究の第1歩をこうした「虫の眼」で始めれば、きっとおもしろいと感じることができるでしょう。(実際には、学生たちをフィールドに連れて行っても、8割方は「お客さんの眼」でしか見ておらず、虫の眼にはほど遠いのが現状ですが……。)

このように「虫の眼」は、社会学研究にとって非常に大切なものですが、ずっと「虫の眼」のままでいいのかということになると、私は否と言わざるを得ません。虫の眼には鳥の眼に見えない様々なものが見えるでしょうが、「群盲、象に触る」とか「木を見て森を見ず」という格言があるように、一部しか見えていないのにそれで全体を判断してしまうというミスを引き起こしやすいのです。もちろん、学問の性質によっては、無理に全体について語る必要がないというものもあって、そういう学問においては虫の眼から見えたディテールだけが重要であるという場合もあるでしょうが、社会学はそういう学問ではありません。虫の眼から見える事実は大切だけれど、それを全体の中に位置づける視野というものがある、はじめて社会学研究と言えると私は考えています。「虫の眼」に対応する比喻を使わせてもらえば、大空から全体を見渡すための「鳥の羽」も社会学にとっては不可欠なのです。つまり、「虫の眼」と「鳥の羽」を持つ社会学研究者が、私の理想とするところなのです。(2002.3.31)

## 第9章 30秒でわかる社会学

今はどこの大学でも「オープンキャンパス」というイベントをやっており、たくさんの高校生が大学選びの参考として、この機会に大学を訪問し、大学生活に関して、大学での学びに関して、いろいろな疑問を質問してきます。社会学に多少なりとも興味を持っている高校生たちがやってきて質問することと言えば、ほぼ間違いなく「社会学って、何を勉強するんですか?」「社会学って、よくわからないんですけど、何なんですか?」といった

質問です。実は、この質問は高校生からだけでなく、いろいろな場面でいろいろな人から発せられて、そのたびに、社会学を専攻している学生たちを悩ませます。他の学問を専攻している友人から、親戚のおばさんから、そして就職活動の面接官から、さらには会社の同僚から、とどこまでもつきまといまいます。社会人になった卒業生の中には、「いやあ、私は劣等生で、社会学のことは結局よくわからないまま卒業してしまったので、私に社会学のことは聞かないでください」なんて逃げを打っている人もたくさんいそうな気がします。しかし、社会学に魅力とこだわりを感じ続ける人は、そんな逃げは打ちたくないはずです。実際私の教え子の中には、社会学を知らない人にもなんとか一所懸命社会学をわからせようと努力してくれている人がいます。その1人がこんなことを言っていました。「私でも10分ぐらい説明したら、相手も大体社会学のイメージをつかんでくれるのですが、もっと簡単に短く社会学を説明できないもののでしょうか？」今回オープンキャンパスで高校生たちに説明をしながら、うまく喋れば30秒ぐらいで理解させることができるかもしれないという説明の仕方を考え出しました。ちょっとここに書いて公開してしまうのはもったいない気もしますが、自称「社会学の伝道師」ですから、この説明があちこちで使われるようになるとしたら、それは社会学の普及に大きな貢献をしたことになるので、よしとしたいと思います。

さてその説明ですが、まず「社会学って何を勉強するのか？」とか「社会学ってわかりにくい」という人たちに、最初に理解させなければいけないことは、社会学という学問が、他の社会科学（例えば、法学や経済学）のように、ある特定領域を対象とした学問ではないのだということです。ほとんどの人は具体的な物（事象）をイメージできたときにわかったという気になるものです。逆に言うと、具象物がイメージできないときはなかなかわかったという気持ちにはなれないものです。法は、法律や裁判を、経済は貨幣や銀行という具体的な物をイメージさせるのに対し、社会という言葉で、具体的な物を思い浮かべられる人はまずいないでしょう。社会という言葉はすべてを含み込んでしまっていますので、この領域を研究するのが社会学という限定の付け方はできないのです。具体的な物（=研究対象）をイメージできない社会学が自らのアイデンティティを確立させているのは、独自の考え方、物の見方をすることによってです。その独自の見方とは、社会で生じている森羅万象を社会の仕組みやあり方と結びつけて捉える捉え方です。一見個人的と思われるようなことであっても、特殊だと思えるような事件でも、ほとんどの場合、その背景に社会の仕組みやあり方が関わってきています。そのつながりを見通すことができれば、どんな対象を研究しても社会学になるのです。（このタイミングで最近生じた個別の事例や聞

き手にとって身近な事例をあげて具体的にこの捉え方をしてみせれば、相手の理解度は大きく増します。) これで基本的な説明は終わりです。時間があれば、この社会学の捉え方(社会学的思考)が、通常生活している中ではなかなか身に付かないものなので、まさに大学に入って学ぶ価値のある学問なのだという説明をするとよいでしょう。通常生活しているときに視野に入っているのは、自分、家族、友人程度で、社会との関わりなんて意識しないんじゃないですかと話を持っていくと、社会学的思考の価値も伝わると思います。いかがですか、理解していただけたでしょうか。自分でもうまく説明できそうですか。まだうまくできそうもないと思った人のために、最後に説明の手順をマニュアルのようにまとめておきます。

1. 社会学が他のイメージしやすい学問と違って特定領域の研究ではないと話す。(聞き手の学問に対する「常識」を崩すことがポイントです。)
2. 社会学は考え方を学ぶ学問だと話す。
3. その考え方とは、身近なことや個別のことをも、社会の仕組みやあり方と結びつけて捉える見方であると話す。
4. その考え方(=社会学的思考)ができれば、どんな対象でも社会学になるので、社会学ではいろいろなテーマが研究対象になるのだと話す。

【ここまで30秒で話せると思います。以下は、もう少し時間がある場合に、相手の理解度をさらに高めさせ、かつ社会学の価値を納得させるための手順です。】

5. 身近な例をあげて、社会の仕組み・あり方と実際どうつながっているかを示してみせる。(聞き手がすぐに納得できるよい例を用意しておくことが必要です。)
6. こういう風に社会とつなげて考えるという考え方は、普通に生活しているときにはあまり考えないでしょ?と問う。(まず99%の人がそうだなという顔をします。)
7. 日常生活をする中で、われわれは「自分、家族、友人」という身近な関係者のことは常に考えるようにトレーニングを自然と積んできているけれど、社会との関係は特別のトレーニングを経なければ、なかなか考えるようにはなれないものなのだと話す。
8. そのトレーニングこそ、大学での社会学教育で行われていることなのだと話す。
9. そして、この社会学的思考が身に付けば、これを身に付けていない人が気づかないような因果関係が見えてくるので、この社会を生き抜いていく上で大きなプラスになると話す。(例えば、商品の開発を任された時に、「自分、家族、友人」の視野だけでは、限られた物しか思い浮かばないであろうといった例や、自分の子どもの学校の問題を考える

際にも全体が見えていれば、近視眼的な失敗をせずに済みますよといった例を出すといいでしょう。)

以上です。聞き手の納得の度合は、具体例の出し方によって大分変わるとは思います、そこはあらかじめ準備できる場所ですので、いくつか事前にネタを用意しておけば、うまく説明できると思います。今度、誰かに社会学とは何かと問われる機会があったら、ぜひこのマニュアルに従って説明してみてください。これまでとは全く違う反応が返ってくると思いますよ。(2005.8.1)

## 第10章 文学的な、あまりに文学的な……

### —— 見田宗介著『社会学入門——人間と社会の未来』(岩波新書) 批判 ——

これは一体誰に向けて書かれた「社会学入門」なのでしょうか。内容紹介代わりにちょっと目次だけ書いておきます。

序. 越境する知 / 1. 鏡の中の現代社会 / 2. <魔のない社会> / 3. 夢の時代と虚構の時代 / 4. 愛の変容・自我の変容 / 5. 二千年の黙示録 / 6. 人間と社会の未来 / 補. 交響圏とルール圏

東京大学駒場キャンパスで33年と共立女子大学で7年、教養の社会学を担当し、その講義の中で学生の反響がよかった部分を集めたと「あとがき」に書いておられますので、共立女子大ではともかく、東大の学生たちには、これで社会学入門の役割を果たしていたのは確かなのでしょう。私もかつて駒場にいましたが、たまたまその年度は見田氏による社会学の講義は行われておらず、私は聞いていません。もしもこの内容で「社会学入門」の講義を聞いていたら、私は社会学を選んでいなかったかもしれません。まあ当時は難しいことをわかった気分になりたい「頭でっかち」の東大生になろうとしていたところがありましたから、絵に描いたような軽やかに浮遊する知識人の典型である見田氏の講義を生で聞いたら、素直に感動した可能性もありますが……。ちなみに、私は駒場の教養部時代に「社会学」という名の講義は受講していません。その年は見田氏ではない別の方が社会学の講義を担当していましたが、単位は取りやすいがおもしろくない講義だというのが先輩たちの一致した声でしたので、履修しませんでした。その講義も取っていたら、社会学に幻

減して専門に選んでいなかったかもしれません。

さて、話を戻すと、この本は、決してつまらない本ではありません。この本が「人間と社会の過去、現在、未来」とでもいったタイトルで出版されていたら、別に批判することはありません。見田氏独特の思い入れたっぷりの文学的言い回しを駆使した知的刺激を与える本として、書店でパラパラと見て、そのまま購入せずに通り過ぎたと思います。しかし、この本には『社会学入門』というタイトルがつけられていましたので、社会学教育に、あるいは社会学がどういう学問であるべきかに関して一家言を持つ私としては、通り過ぎるわけにはいきませんでした。そして、読んでみた感想はと言えば、これで社会学がわかる人はほとんどいないだろうが、これでわかったと思われるのはもっと困るというものです。

見田氏は卒論が単行本化されたという伝説を持つ若い時からの俊才で、本来私のような凡才が批判することのできるような存在ではありませんが、私も私なりに30年社会学と真正面から取り組んできましたので、私なりに社会学観を確立しています。そして、東大生のような何でもわかったふりをする学生ではない人たちを相手に、どうやって社会学の魅力を伝えていくかを常に考え続けてきましたので、どうしてもこの本を見過ごすことはできませんでした。はっきり言って、これは「社会学」ではなく「社会評論」です。確かに、私たちが学生だった頃には、こういう感じの知識人的言説がよく社会学として語られたりしていましたが、今ではこういう本は少なくとも「社会学入門」などというタイトルではもう出せなくなったはずと思っていたのですが……。見田宗介という「ビッグ・ネーム」ゆえに許されたことなのかもしれませんが、岩波新書という人口に膾炙しやすい媒体なので、この本がもたらす「社会学」イメージの30年前への回帰（勝手なことを好き放題に言うディシプリンの確立していない学問というイメージへの回帰）を私はおおいに怖れます。もちろん、オーソドックスな社会学を学んでちゃんと知った上で読むなら、この本も何の問題もないですが、おそらくそうではない読み方をする人が少なからずいるでしょう。社会のタイプとして「共同体」「集列体」「連合体」「交響体」という4つをあげていますが、これも見田氏が造った概念で一般に流布しているものではないのですが、社会学の基礎知識のない人が読めば、これが社会学者に共有されている一般的な社会の捉え方かと誤解されてしまいそうです。この本は、社会学の応用篇の本として位置づけて読むべき本であって、決して「入門書」として読むはいけない本です。(2006.5.22)

## 第11章 名著選びは難しい

### —— 竹内洋著『社会学の名著30』(ちくま新書)を読む ——

先日著者を囲む合評会があり、そこに参加して、著者である竹内先生には直接コメントしたのですが、影響力のある新書本ですので、ここでも取り上げて一言を述べさせていただきます。

私たちのような社会学に関して自分の立場をすでに築いている人間からするとこの本はとてもおもしろい本です。名著と呼ばれる本を功成り名遂げた社会学者が若き日にどう読んだのかというエピソードを交えた内容は、自分の経験と比較しながら、自分もそうだったとか、なるほど時代が違うとそういう受け止め方だったのかと興味深いところだけでした。しかし、この本が世間一般にどういう印象を与えるだろうかという別の観点から考えると、単純に「おもしろかった」では済まないという気がしています。この本は、あくまでも著者が「おもしろい」と思う社会学書を取り上げたのであって、他にも社会学の名著はたくさんあるということは、著者自身も「はじめに」で述べています。しかし、新書本を買う多少社会学に興味を持ってくれる学生さんや一般の方々には、その辺は深く気に留めずに、「これが社会学のスタンダード30冊なのだ」と思って読んでしまうだろうと思います。(売れるためには、出版社的にはそういう誤解はぜひしてほしいところでしょう。)そこがちょっと怖いのです。この本のタイトルが、『おもしろい社会学書30』あるいは『一社会学徒の選ぶ社会学の名著30』であれば、私はこの本を何の躊躇もなく皆さんにお勧めしますが、現在のタイトルでは単純にお勧めできません。「営業妨害だよ」と竹内先生から怒られそうなので、言い方を変えましょう。買って読んでもいいですが、その際にはこれはあくまでも竹内先生がおもしろいと思った社会学書30冊であり、決して社会学者の間で多くの人がスタンダードだと思う本ばかりではないということを意識してほしいと思います。別の社会学者が選べば、半分ぐらいは入れ替わるだろうと思います。もしも私が選ぶなら、やはり機能主義関連の書物は必ず入れるでしょう。「おもしろい」という意味ではあまりおもしろくはないかもしれませんが、「社会学の名著」というタイトルをつけるなら、やはりその関連の本を一切入れないというのは問題だと思います。

ちなみに、私がこんな新書本を書いてくれと頼まれることはないと思いますので、ここに著者風にパーソンズの『社会体系論』の思い出を書いておくと、この本は、大学3年の時に同じ学科のメンバーたちと自主ゼミで読みました。概念の説明ばかりが並んでいて頭の痛くなる本でしたが、こういう本をきちんと読めなければ、社会学は理解できないんだ

と思い、線を引きながら、わからないところを何度も何度も読み直し、みんなで解釈の仕方について議論した思い出があります。その自主ゼミのメンバーの大部分は研究者になったわけではありませんから、しみじみ昔はこういう専門書を学部学生が買ってちゃんと読んでいたんだと思います。しかし、今の時代、こんな専門書を買って読めと言っても無理があるでしょうから、社会学の名著を知りたい初心者は、ちょっと粗いところもある本ですが、那須寿編『クロニクル社会学』有斐閣あたりから入るのがよいのではないかと思います。(2008.5.21)

## 第12章 文学と社会学

先日、駒場にある近代文学館で行われていた「近代の名作 昭和」という展示を見してきました。昭和という時代にどういう文学が現れたかを時代順にわかりやすく見せてくれていました。芥川龍之介の自殺とともに始まった昭和文学は、プロレタリア文学の隆盛と弾圧、川端康成らの新感覚派、堀辰雄らの新心理主義と続き、転向文学、島崎藤村や志賀直哉といった大ベテラン達の復活、従軍作家たちの仕事を経て、戦後を迎えます。共産党寄りの民主主義文学運動が復活する一方で、太宰治や坂口安吾たちのいかにも戦後文学と言える退廃的な無頼派文学も生まれます。「第三の新人」と呼ばれた吉行淳之介や遠藤周作の後には、石原慎太郎や大江健三郎といった学生でありながら、芥川賞を受賞する新人が出てきます。その後も、様々な作家が登場してきますが、とりあえず文学史はこのへんまでにしておきましょう。この展示を見ながら、私がしみじみ思ったことは、文学と社会学というのは、ともに「社会と人間の関係」に関心をもっているが、その焦点のあて方が異なるのだということでした。

上記の簡単な文学史を見てもわかるように、文学史上で名を残す作家たちはその時代をよく反映した作品を書いた人々ばかりです。大正デモクラシーの自由な空気の中で輸入された社会主義、共産主義思想が、初期資本主義的要素を色濃く残していた昭和の労働環境の悲惨さを描くプロレタリア文学として花開くものの、軍国主義化を急速に進める大日本帝国のもとで弾圧され、共産主義からの転向を題材とする転向文学まで生みだすわけです。戦後もこれまでの価値観が崩壊した中で利他的な快楽を求めるような生き方を自ら実践し、かつそれをそのまま題材とした無頼派の作家たちが現れ、「戦後が終わった」と言われた年には、若者の性と享楽を描く石原慎太郎が登場してきます。そして、1960年代には、政治と恋愛の二大テーマで悩む学生たちを主人公とした文学が次々に登場します。まさに、文

学者たちは、時代（社会）に翻弄される人々に焦点をあて、彼らの苦境を描くことで、文学を成立させているのです。

社会学者が昭和を語ろうとした時にも、同じように、時代（社会）に人々がどう影響されていたかを分析しようとする。メルクマールとする現象や事件は文学者たちが題材にしてきたものとほとんど重なるでしょう。ただし、社会学者は固有名詞をもった個人に主たる焦点をあてて研究することはしません。社会学にとって特定個人がどんな心情であったかについては強く関心を持つことはなく、全体としての、あるいはせめてある階層、ある集団の人々がどのような社会心理に陥り、どのような集合行動を起こしたかに、主たる焦点をおくのです。ここが、文学と社会学の一番大きな違いです。

もうひとつ大きな違いがあるとしたら、文学は比喩を駆使して読者に理解をさせようとするのですが、社会学では比喩の使用に関して禁欲的にし、論理と例示で理解をさせなければならぬというところですね。文学にとって比喩は生命線です。比喩のない文学なんて味付けのされていない料理みたいなものです。この比喩表現が巧みかどうかで、作家のセンスの良さが決まると言ってもいいくらいです。これに対して、社会学者は比喩でごまかしてはいけません。比喩とは要するに言い換えにすぎませんので、説明したことにはならないのです。このあたりのことについては、上述の第4章「比喩の魅力と危険性」に書いた通りです。

さてこのように、文学と社会学の共通点と相違点を明確にすることはできるのですが、ではどちらが実際の人々に時代（社会）に対する感性を高めさせるかということ、残念ながら、社会学に軍配を上げるわけにはいきません。大多数の人にとって、社会学より文学の方が手取りやすく、理解もしやすく、影響もされやすいと思います。「物語」が人を引きつけるように、社会学の研究成果が人を引きつけうるかということ、なかなか難しいと思います。しかし、100%勝てないというわけでもありません。データが示す厳然たる事実によって、人々が事態の深刻さを初めて認識できることも少ないからです。人が文学から得るものは、実は自分の感覚で得られるものとそうは変わらないことが多いですが、全体を示すデータは自分の感覚では得られないような思いがけない事実を知らしめてくれます。そういう時には、個人の物語より、全体のデータを提示する社会学が存在感を示しうるでしょう。

最後に、ご存じの通り、私は「社会学者」としてのアイデンティティを強く持っていますが、ただ自分の人生のすべてを社会学者のアイデンティティに従ってのみ生きる必要はないと思っています。1回だけの人生ですから、多面的に生きてみたいという欲望も持つ

ています。私のもうひとつの、より重要なアイデンティティは「大学教師」です。大学生たちへの教育を通して、社会に通用する人間を育てたい、そこにこそ自分の生きがいがあると思っています。その後者のアイデンティティからすれば、社会学的手法にのみこだわる必要はないと思っています。文学的なアプローチであっても、学生たちが社会により関心をもつようになり、個人と社会の関係を考えるようになってくれるなら、どんどん使っていきたいと思います。私が書き、自分のHPに掲載している2つの戯曲（「桜坂」、「紫陽花」）も、それぞれ戦争に巻き込まれた時代の若者と、学生紛争時代の若者を描いていますが、これも社会と個人の関係を若者たちにわかりやすく伝えうるのではと思ったのが、執筆動機のひとつでした。文学的手法を使って書いてみたい社会的テーマは他にもいろいろあるので、いずれ時間ができたらまた書いてみたいと思います。（2012.1.24）

## おわりに

長く問い続けてきた「社会学とはどのような学問であるべきか？」という問いに対しては、2000年に発表した「社会学を考える ― 社会学の再生を求めて ―」（『関西大学社会学部紀要』第32巻第1号，179-204頁，2000年9月）で、すでに自分なりの答えを出しており、それ以降私の社会学観にぶれはない。本稿は、その応用編とも言える内容であり、前作では語っていないことを語ろうとしたため、本稿のみを読んだ読者にとっては、私の社会学観が100%伝わっていないかもしれないことを怖れる。ぜひ、前作もお読みいただきたい。また、本紀要には他にも「社会的エッセイ」のシリーズ（1～6）や「社会学カリキュラムの変遷」を追った研究ノートや論文も発表している。こちらもぜひご一読いただきたい。

なお、本稿の各章の文体は、ウェブサイトで公開した当時のまま、「です・ます」調にさせてもらった。修正は可能だが、最初から「です・ます」調で語りかけるように書いた文章を、「である・だ」調に直すと、やはり微妙なニュアンスが変わってしまうためである。ご理解いただければ幸いである。

—2012.6.4受稿—